



岡田実教授に聞く

現場で学び、人をつなぐ国際交流

拓殖大学国際学部・岡田ゼミの取り組み



Q 1 先生ご自身について教えてください。

岡田実 (以下、岡田) 現在、拓殖大学国際学部で教鞭をとっていますが、それ以前は日本国際協力機構（JICA）に長年勤務していました。中国事務所の副所長なども務め、中国を中心に主にアジア地域で国際協力に携わってきました。

現場での経験を通して強く感じたのは、国際協力や国際交流は机上の知識だけでは成り立たないということです。そのため、大学では学生たちに「現場で直接学び、多様な人々と交流し経験をすること」の重要性を伝えたいと考えています。

Q 2 岡田ゼミではどのような教育を行っていますか。

岡田 岡田ゼミでは、「現場から学ぶ」という姿勢を最も重視しています。

教室で理論を学ぶことも重要ですが、それだけでは十

分とは言えません。海外研修や地域交流、フィールドワークなどを通じて、実際に人と出会い、文化に触れることで、より深い理解が生まれます。

ゼミには多くの留学生在籍しており、それぞれの文化や経験を共有しながら学び合う環境が整っています。異なる背景を持つ学生同士の交流そのものが、国際教育の重要な一部だと考えています。

Q 3 海外研修について教えてください。

岡田 岡田ゼミでは、毎年の夏休みや冬休みを利用して、学生が自ら企画した海外研修を実施していますが、2025年夏は、中国・雲南省に行ってきました。

昆明、麗江、大理、西双版纳を訪れ、歴史や文化、少数民族の暮らしについて学びました。麗江古城や大理古城を見学し、大理では彝族の伝統工芸である扎染（ダイ）を体験しました。また、西双版纳では傣族をはじめとする少数民族文化にも触れました。

学生たちは現地で人々と交流しながら学ぶことで、中国の多様性や地域ごとの特色を実感することができました。こうした経験は、教室では得られない非常に貴重なものです。

Q 4 2026年の高尾祭での取り組みについて教えてください。

岡田 高尾祭は、八王子国際キャンパスの学園祭ですが、2026年6月、ゼミの3年生が初めて高尾祭の教室企画に参加しました。サークルからの出展がほとんどの中、ゼミとして唯一の出展であり、学生たちにとって大きな挑

戦となりました。

テーマは「日本人に訪れてほしい中国の名所」です。学生たちは自分たちの出身地や海外研修で訪れた地域をもとに、中国の魅力を日本の来場者に伝える展示を企画しました。

Q5 どのような地域を紹介したのですか。

岡田 三つの地域を取り上げました。

まず江蘇省では、南京の中山陵や夫子廟、秦淮河といった歴史文化を紹介し、連雲港については花果山や港湾都市としての特徴を説明しました。

次に中国東北地方では、ハルビンの冰雪文化や、大連の歴史ある街並み、海辺の景観を紹介しました。

そして雲南省では、麗江、大理、西双版纳を中心に、民族文化や自然、伝統工芸などを紹介しました。

Q6 展示で工夫した点は何ですか。

岡田 写真やパネルだけでなく、実物を活用した展示を取り入れた点です。

学生が制作した彝族の扎染作品や、民族楽器である葫芦絲（ひょうたん笛）を展示し、実際に演奏も行いました。視覚だけでなく、音や体験を通して文化を伝えることで、来場者により深く理解してもらうことができたと感じています。

Q7 学生たちはどのような成長を見せましたか。

岡田 展示の準備から当日の運営まで、すべて学生自身が主体となって取り組みました。

どのようにすれば日本人に興味を持ってもらえるかを考え、日本語で資料を作成し、来場者に説明しました。その過程で、日本語での表現力やコミュニケーション能力だけでなく、企画力や協調性も大きく向上しました。

また、自分の故郷について改めて調べることで、文化への理解や誇りを深めることができたという声も多く聞かれました。

Q8 岡田ゼミの魅力は何だとお考えですか。

岡田 最大の魅力は、「実践を通して学べること」です。海外研修や地域交流、学園祭での展示など、さまざまな活動を通じて、学生は自ら考え、自分の言葉で発信する力を身につけていきます。

また、日本人学生と留学生、ゼミ生と地域住民との交流を通じて、異文化理解や相互理解を深めることができる点も大きな特徴です。

さらに、実践を通じて学んだことを学術論文として表

現する力も身に付けることができます。国際学部では、優秀な卒業論文を表彰する制度がありますが、岡田ゼミ生は8年連続受賞しており、中にはNo.1の最優秀賞を獲得した中国人ゼミ生もいます。また全学年を対象とした国際学部奨学論文コンテストで、昨年度、中国人ゼミ生がNo.1の国際学部長賞を受賞しました。

Q9 今後の岡田ゼミに期待することを教えてください。

岡田 岡田ゼミは、中国・東アジアと日本をつなぐ国際交流・理解の場として活動を続けています。

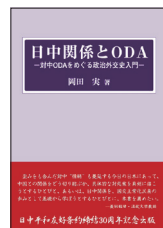
留学生は日本の文化を学ぶだけでなく、自分の文化を日本社会に伝え、日本人々がそれを理解する。そのような双方向の交流は、民間レベルでの日中友好にもつながります。

今後も学生たちには、世界に目を向け、自ら行動し、国境を越えて活躍できる人材へと成長してほしいと考えています。



岡田 実（おかだ みなのる）

拓殖大学国際学部教授／前国際開発研究所長。民間企業勤務を経て国際協力機構（JICA）に奉職し、2014年に拓殖大学教授に就任。JICAでは北京大学留学期間、三回北京に駐在し約十年間対中ODAに従事。現在、教鞭をとるかたわら、日中未来の会、国際善隣協会などで日中民間交流活動に参加。2024年に第7回「忘れられない中国滞在エピソード」で一等賞を受賞。主な著書に『日中関係とODA—対中ODAをめぐる政治外交入門』、『「対外援助国」中国の創成と変容1949-1964』、『日中未来遺産 中国「改革開放」の中の「草の根、日中開発協力の「記憶」、監訳書に『「一帯一路」共同建設10周年——現地レポートから見る実情と全体像』（人民日報叢書 vol.5）がある。



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

十歳の私が一人で武術留学した話

歯学生 住友 麻野香



中国・杭州の「少林武術中心」にて、師匠達や生徒達と共に撮影した集合写真。
写真右下で正座をしているのが筆者。

2004年の秋、当時十歳だった私は中国・杭州の地に降り立った。これは誰に言われたからでも無く、自分の意思で決めた事。それは、映画「少林寺」でも有名な、胡堅強という私の師匠が作った武術学校・少林武術中心への留学のチャンスが舞い込んできたからだ。ここには中国全土からプロの武術家を目指す生徒達が選抜され、集っている。歳もそう変わらない生徒達が周りの期待を背負い、確固たる意思の強さを持ってここにいるのだ。そんな中、私のような他国の小学生に中国で学ぶ機会を与えてくれたことを幸せに思う。

食事と就寝の時間を除いて、朝から晩までずっと武術の鍛錬に励む毎日。全身の筋肉痛がしばらく続くほどの過酷な練習。煌びやかな映画や舞台の裏側の厳しさに挫けそうになった事もある。それは皆同じなはずなのに、師匠達や友人達は優しく励ましてくれ、敬意を持って接してくれる。強く優しい、武道の志を持つ彼らの振る舞いを心から尊敬していた。だからこそ私一人だけ泣き言

は言えない、と自然に思うことができた。尊敬できる人達と共に切磋琢磨できるこの機会に感謝し、日々の訓練に必死で食らいついていた。

滞在中に、師匠達のご好意で中国武術の大会に出場する機会を頂いた。私は左足の付根を怪我していたので不安もあったが、練習の成果を皆に見せる時だ、と意気込んでいた。私は長拳の型を披露した。基本の歩型である弓歩、馬歩、仆歩と続けて足を運んでいく。しかし、特に片足を伸ばしたまま深く腰を落とす仆歩は負傷している私には難しい姿勢で、バランスを崩してその場で尻餅をついてしまった。失敗した！ 瞬時に頭によぎった。続いて、感情がふつふつと内面から湧いてくる。悔しさ、悲しさ、そして自分に対する怒りが。師匠達や友人達の「加油！」の声にハッと気付かされる。最後までやり遂げるしか私に残された道はないのだと。

そこからは、失敗もなく型を終えた。無我夢中で上手くできていたかは自分には分からなかったが、結果は銀メダルだった。しかし、銀メダルだからこそ達成できなかった時の悔しさや、失敗を恐れずに物事を果敢に挑戦する勇気を学ぶ事ができた。

そんな日々が続いたある日、日中関係に端を発したデモが行われた。この時、私は改めて「異国」に居ることを痛感し、なんだか一気に遠い所に来てしまったように感じて、途端に恐ろしくなった。少しピリついた空気を肌で感じた。ホームシックになったことは無かったが、この日初めて本能的に、ここは危険かもしれない、日本に帰った方がいいかもしれない、と思った。不安から堪えられずに涙が出た。未知への恐怖が大きかった。

師匠達の配慮や、友人達が寄り添ってくれたこともあり、私の不安や恐怖は少し和らいだ。皆の優しさに触れて、なぜ恐いと感じたのか改めて向き合う事ができた。

まずは、私の中で私の知る「中国」という国が一気に

大きくなった事だった。なぜなら、それまで私の知る「中国」は私の周りの中国人達の事であり、苦楽を共にし、絆を深め合った彼らに守られたあの環境の事でしかなかったからだ。しかし、デモで知った「中国」の新たな一面は、今まで私に優しくしてくれていた師匠達や友人達と比べ、私の中で大きなギャップを感じ、ショックを受けたのだと気づいた。

次に、「嫌われる理由を知らない事」だと思った私は、今回のデモの原因を周りの大人達に尋ねた。当時10歳の私にどう説明するか悩んだ結果、彼らは「歴史の教科書に載っている事が日本と中国で違っているから」だと簡単に説明してくれた。学ぶ歴史が国によって違う事を初めて知った私はびっくりした。そして、国が違えば、育つ環境も得る情報にも違いが生じる事を理解した。また、それらが違えば当然、価値観や思想も変わる事も。そのため、もしかしたら私の周りの中国人達も日本に対する思いがあったかもしれないが、日本人である私を元気づけようとする心遣いが嬉しかった。

こうして、幼いながらに私の中で強烈な体験となったデモもいつの間にか落ち着き、私はその後も引き続き、杭州で学び続けた。うまくは言えないが、この一件で国という単位での物の見方や世界の広さに気づいた事で、もっと大きく物事を捉えながら日々を過ごしていたように思う。

10歳での中国留学は私にたくさんの気付きと勇気を与えた。私は中国を離れた後も、自らアメリカやヨーロッパへと留学するチャンスを積極的に掴み、その国々での教育を受けながら文化を学んだ。中国での学びは、広い世界へと続く扉の鍵となったのだ。そして、これからその鍵でより広い世界への扉を開いて行こうと思う。

住友 麻野香 (すみとも まやか)

1993年岐阜県生まれ。2歳の時に、母の研究留学に連れられ、カナダ・モントリオールへ。帰国後、東京にあるニューインターナショナルスクールに入学。10歳の時に初めて一人で中国へ武術留学する。世界への興味に拍車がかかり、14歳でアメリカ・バーモント州にあるSt. Johnsbury Academyへ高校留学。医学の道を進むため、ハンガリー国立デブレツェン大学の医学部へ留学。EU医師資格取得。帰国後、新潟大学歯学部歯学科に編入学し、医科歯科のダブルライセンスを目指す。

「私の中国物語」その②

中国で巡り合った素晴らしい家族の思い出

フリーランス通訳 大西 裕子

30年以上前になりますが、当時大学生で中国語を勉強していた私は、夏休みに天津にある南開大学で中国語集中講座を受講することになりました。

当時は交換留学で米国の大学に滞在中で、米国から日本に帰国する飛行機を予約したところ、なぜか韓国ソウル行きのチケットがついてきたので、仁川港から天津行の船で行くことにしました。中国に行くのは初めてでしたが、国際船路なのでどこかで両替が出来ると思いきや、この船は中国から韓国に出稼ぎに行く朝鮮族の中国人が殆どで、観光客は皆無でした。

両替も出来ず、夜天津港に到着してからどうしようか途方に困りました。幸運にも船内で会話をした朝鮮族の女の子が私の様子を見て同情してくれ、自分の婚約者の家族が迎えに来るから一緒においでと招待してくれました。ほんの数時間過ごしたただけの方でしたが、溺れる者

は藁をも掴む心境でお言葉に甘えることにしました。彼女は美玉さんという朝鮮族の中国人で、婚約者は漢族でお姑さんとハルビンから天津港に迎えに来ていました。婚約者もお姑さんも優しい方で、初対面の私を彼らがその夜泊まる招待所（中国人専用の宿泊施設）に連れて行ってくれました。当時は外国人と中国人が使える施設は区別されていて、当然外国人は宿泊不可なのですが、彼らが招待所のスタッフを説得してくれ、なんとか一晩泊めてもらえることになりました。

招待所に到着した時にはもう夜中で、ビーチで使うようなベッドが沢山並べられている大部屋で、貴重品を抱きしめて真っ暗闇の中寝ました。外貨は持っているものの、人民元も兌換券も持っていなかった私の宿泊料は美玉さんの婚約者家族が払ってくれました。おまけに南海大学行きのバス停まで送ってくれ、バス代も出してくれ

た上、お別れにとジャムの空き瓶のような瓶をプレゼントしてくれました。なぜガラス瓶をくれたのか当時は分からなかったのですが、数か月後彼らを訪問した際にその意味が分かり感動しました。

南開大学の中国語夏季講座は楽しく、あっという間に数か月が経ちましたが、住所を貰っていた美玉さんとは文通を続け、遊びにおいでという言葉に甘えてハルビンを訪問することになりました。

当時の中国の鉄道事情は酷く、硬座といわれる二等列車はいつでも大混雑で、トイレに行くのもままならない状態で10時間以上過ごしました。何の前知識もなしに乗った私は、周りの乗客が全員ガラスの空き瓶を持っているのを見て驚きました。彼らは長い道中ガラス瓶をコップ、皿、ボウルのマルチ器具として活用しており、それでお茶を飲んだりお湯を入れてインスタントラーメンを作ったりしていて、車中の生活必需品だったのです。美玉さんのお姑さんがくれたガラス瓶がどんなに大事なものだっかを知り、それを見ず知らずの私にくれた彼女の心の優しさに感動しました。それと同時にそのために10時間以上の旅をガラス瓶なしで過ごさなければならなくなったことに、今更ながら大変申し訳なく思いました。

ハルビン駅には美玉さんと婚約者さんが迎えに来てくれて、自宅へ連れて行ってくれました。婚約者さんは3人兄弟で、お兄さん二人はもう綺麗な奥さんと結婚していて、ご両親夫婦と美玉さんと皆一緒に住んでいました。総勢8人のとても賑やかな家庭で、毎日お姑さんが美味しい家庭料理をふるまってくれ、温かい家庭で毎日おしゃべりをしながら過ごす日々は本当に楽しかったです。

ある日の晩、家族のみんなが私をどこかへ連れていくべきかどうか、強烈すぎるのではないか、というような事を深刻そうに相談していました。その翌日、議論を終えた皆さんが私を連れて行った場所は、七三一部隊跡でした。私は七三一部隊の事は知ってはいましたが、実際の収容所と実験の様子展示を目にした時は、やはりとてもショックでした。ただの一介の若者だった私には美玉さんの家族に謝罪することしか出来ませんでした、当時でも反日感情は大きかったでしょうに、日本人の私を温かく迎え入れてくれ、家族の一員の様に接してくれた美玉さん家族には大きく心を動かされました。

その後美玉さんとは文通をしばらく続けましたが、お互い引っ越しが続き、いつしか住所が分からなくなってしまいました。以前のハルビンの住所は宛先人不明なので連絡はとれませんが、美玉さんにご家族はどうしているだろうとずっと思っていました。貧乏だった学生時代に巡り合ったので何のお返しをすることも出来ず、今消息が分かれば何かしらの恩返しが出来ると、と何度も思いました。

広大な中国には色々な人がいますが、日本では考えられないくらい心の大きい善良な人々が居る、そう教えてくれた美玉さんと家族には生涯感謝の念を持ち続けます。

謝謝美玉さん、今もこれからもお元気で幸せであることを願っています。

大西 裕子（おおにし ひろこ）

1971年奈良県生まれ。奈良、東京、台湾で育ち、早稲田大学在学中に南開大学に語学留学。その後アメリカの大学院卒業後結婚し、インド、ベトナム、フィリピン、シンガポール、日本、香港で仕事をしながら3人の子供を育てる。父親は神戸外国語大学中国語科卒業、息子もイギリスの大学時代に北京の人民大学に留学し、親子三代で中国に縁がある。



長男の人民大学留学中に河南省に家族旅行に行き、洛陽、鄭州近くの歴史的な名所巡りを楽しんだ

「私の中国物語」その③

君の名は？

教員 宇野 雄二

「美味しい中華を食べに行こうぜ！」——親友I君の誘いにふわっと乗って、中国旅行に出かけたのは31歳になった翌日だった。

1986年3月下旬、上海に降り立った僕らは、自ら立てたプランをもとに、蘇州・無錫・杭州・紹興をわずか一週間で回って来ようと考えていた。往復の航空券だけは予約して、あとは気ままに江南の春を楽しもうという料簡だった。ちょうど日本国内を旅するように中国も旅行できるものと考えていたのだが、甘かった。当時の中国は改革開放からまだ日が浅く、交通機関も宿泊施設も暢気な二人組を受け入れてくれるほど整備されていないことに気が付くはずもなかった。

試練はすぐに訪れた。列車の切符が簡単に取れない。一度だけ座席が取れた後はずっと立ち席。最後にはどの列車の切符も買えなくなった。ホテルに泊まるのも苦勞した。杭州ではどこでも「部屋は空いてない」とすげなく断られ、次のホテル、また次のホテルと濡れ鼠になって歩いた時は、雨に煙って美しいはずの西湖の景色も目に入らなかった。旅のメインの中華料理も、有名店はどこへ行っても長蛇の列。食事を断念せざるを得ないこともあった。

そんな中で最後の訪問地・紹興へと向かった。駅でどんなに粘っても切符は手に入らなかったため長距離バスに変更。杭州からずいぶん長い時間バスに揺られて、やれやれなんとか紹興に到着した。

しかし、バスターミナルに着いてから困ったことが発生した。ガイドブックの地図にある場所とはどうも違うようなのだ。近づいてきたおばさんから地図を買った。目的地の紹興飯店の場所は地図に書いてあるのだが、残念ながら現在地が分からない。おばさんは地図の一点を指さしてここだと言う。だが、今度はホテルの方向が分からない。やりとりを見ていたおじさんが近づいてきて、「紹興飯店ならあっちだ！」と顎をしゃくる。しかし、おばさんは「違う、違う！」と全く別のほうを指す。お互いに自信ありげに主張するからどちらを信じていいか分からない。そうこうするうちに野次馬がどんどん集ま

ってきた。僕らをぐるっと取り巻いて事の成り行きを面白そうに眺めている人もいれば、この議論に参加する者も出てきて収拾がつかない。どうしたらいいんだ！

するとその時、一人の青年が現れた。僕が手に持っていた地図をさっと奪い取って、「一緒に行こう！」と歩き出す。その勢いにおばさんもおじさんも置き去りにされ、地図を奪われた僕とI君は彼の後に付いて行くしかなかった。青年の足取りは自信に満ちている。ともかく彼を信じるしかない。



上海大廈をバックに蘇州河のほとりに立つ私（左）とI君

「紹興飯店は分かりますか？」

「分かる」

「どこにありますか？」

「あっち」

「どれぐらいかかりますか？」

「すぐ」

白いワイシャツに黒いズボン、刈り上げた短い髪。どう見ても素朴な労働者にしか見えない青年の答えは簡潔極まりない。そして表情は硬く、笑顔も見せない。

彼は早足でどんどん歩く。途中、小さな川を挟んだ向こう側に若い女性が立っていた。知り合いらしいその女性と大声で何事かを言い合う。いや、怒鳴り合う。双方の表情は険しく、口調は激しい。そのやり取りは全く聴き取れなかったが、僕は想像した。

「何やってるの？ もう仕事の時間でしょ」

「そんなの知ってるさ」

「あんたの後ろの二人は誰？」

「日本人。これから連れて行くんだ」

「またやるの、あれを。やめなさいよ、そんな真似は」

「うるせえな、お前の知ったことじゃねえよ」

僕の空想はどんどん発酵していった。これはまずい展開じゃないか？

彼は歩調を緩めず、僕らが眼中にないかのようにひたすら歩く。終始無言だ。20分歩いてもホテルらしい建物は見えてこない。30分が過ぎた。「すぐ」にしては遠すぎる。曲がるごとに道はだんだん細くなり、どんどん薄暗くなっていく。とうとうやっと一人が通れるような狭い路地に入り込んだ。相当やばい！ きっとあのボロ屋の陰から男の仲間たちが躍り出て、さっと僕らを取り囲むに違いない。僕は覚悟を決めた。I君の目にも悲壮な色が浮かんでいる。絶対に来るな、これは！

最後の角を曲がると、突然視界が開けた。大通りに出

たのだ。そして彼の指さす先には紹興飯店がでーんと構えていた。疑って、ごめん！

僕は慌ててポケットを探って、なんでもいいから手渡そうとした。指先に触れた黒のボールペンを差し出すと、とんでもないというように左右に手を振った。

「せめて名前を聞かせて！」

彼はこの時初めて笑顔を見せて、しかし、何も答えず、踵を返してさっさと行ってしまった。

呆然と僕たちは立ち尽くした。見ず知らずの日本人のために貴重なはずの昼休みを費やして、なおかつ何の謝礼も受け取らずに去って行った白いワイシャツの青年。その後姿が37年の時間の彼方を遠ざかって行く、名前も何も分からないままに。

宇野 雄二（うの ゆうじ）

1955年三重県生まれ。三重県立四日市高校在学中に中国古典の世界に親しむ。静岡大学人文学部卒業後、神奈川県と三重県の県立高校に勤務。三重県在勤中に二度にわたり合計4年間、河南師範大学へ日本語教師として出向した。三重県を早期退職した後は上海の華東師範大学などで10年ほど教壇に立ち、帰国後は再び神奈川県立高校で非常勤講師として国語を教えている。

「私の中国物語」 その④

第一个吃螃蟹的人

経営者 岡川 秀毅

私は1985年から2011年の間21年間、北京、天津、上海、香港、台湾に留学・駐在しました。時には辺境地を訪ねたり、仕事からプライベートまで中国ライフを満喫してきた思い出の中からほんの少しご紹介します。

忘れ物 北京空港から初めての弁護士事務所を訪問した時です。女性弁護士さんがタクシーまで迎えに来てくれて手厚い対応にビックリ。ドアを開けて話し込む内に、私のパスポートの入ったカバンを乗せたままタクシーは行ってしまいました。領収書の番号に電話したところ連絡が付き一時間後にタクシーは戻って来ました。カバンも無事です。しかしここで事件が。タクシーは一時間の料金を要求、一方弁護士さんは荷物確認違反で払う必要はないとバトル開始。タクシーはまた走って行こうとしました。最終、お礼の形でお金を渡しカバンは無事戻って来ました。

車上荒らし 蘇州で出張に来た重役が、車に置いていたパスポート入りのカバンを盗まれました。重役は、車に見える所にあるので大丈夫だろうと思い運転手も一緒にランチに誘いました。しかし、車に戻るとカバンはなくなっていたのです。しかもスーツケースの鍵も一緒だったため荷物が出せず頭を抱えてしまいました。私は壊して開けるしかないと思ったのですが、重役は鍵屋を探したいとのこと。何と上手な鍵屋が直ぐに見つかり、ケースを壊さず開け、合い鍵を幾つも製作し、問題は一旦解決。後日、拾ったという人から連絡がありカバンは戻りましたが、現金はなくパスポートも盗難届で失効し災難でした。

犬肉 仕事で貴州省を訪れ、地元名物の花江狗肉屋（犬肉鍋店）に行った時の話です。同行した中国友人達は家で何匹も犬を飼う愛犬家ですが、そこの犬肉をうまいう

まいとペロリと平らげました。驚いていた処、中国人は皆犬肉大好きと教えられました。私も犬は飼っていますが犬肉は食べれませんでした。

一滴の水 上海の元社員さんご家族から私の誕生日に豪勢な食事をご馳走してもらいました。その時に、中国の諺『受人滴水之恩、当似湧泉相報』を聞きました。一滴の水のような恩にも、湧き出る泉のような大ききでこれに報いるべし。困った時に助けてもらったことは、決して忘れずに恩返しするのだそうです。実は元社員さんは会社で悩みを抱えていたようで、私のケアには感謝してくれていたそうです。

高速 天津から高速で北京空港へ急いでいる時の話です。事故渋滞で車は長時間全く動かず、高速道路は長い駐車場と化していました。私の運転手が携帯で誰かに連絡してしばらくすると、突然反対側の北京から天津に戻る道路に運転手の友人の車が急停車！ 運転手は私にスーツケースを持って、中央分離帯を乗り越え向こうの車に乗って下さいと言いました。驚きましたが、私の運転手も中央分離帯を飛び超え、私と一緒に反対側に行き友人の車に乗り、無事に北京空港まで送ってくれました。中国あるあるの本当の話です。

車いすの少女 天津開発区に孤児院があり、私が日本にしかないリハビリ用の足こぎ車いすを中国人と一緒に日本から寄贈した話です。ほぼ寝たきりの肢体不自由の少女に一時間ほど、使い方を訓練しました。2年後再訪しましたがまだ使ってくれており身体能力も回復、明るい笑顔になっており、お役に立てて良かったです。



天津開発区孤児院にて、車いすの少女と

魯迅 上海で、私は一般庶民層向けの家電や家具の信販会社を中国で初めて開業しました。25年前の個人信用情報がまだ整備されていない時期でしたので地元新聞は「最初に蟹を食べた人(魯迅の言葉)」、リスクを冒して新事業を開始する勇敢な人だと報道しました。多数の利用者様がいましたが、返済不能はほとんどなく、個人の資産管理はしっかりしていると感心したものです(日本は当時サラ金の過剰債務が社会問題化していましたから)。

コロナ① 加油武漢！ 2020年2月、天津で弁護士をしている友人から私に、武漢への医療支援の要請があり、中国の方のご支援で、日本製の医療用マスク9000枚、防護服50着、医療用ゴーグル100個、計12箱を天津経由で武漢に送りました。荷物は天津の医療従事者のお陰で無事に武漢に寄贈され、『山川異域 風月同天』(場所が違っても同じ自然や志で繋がっているの意味)の感謝状も天津開発区から頂戴し、微力ながら中国のお役に立てて良かったです。湧き出る泉ほどではありませんが。

コロナ② 2020年3月、感染者治療の最前線である武漢の病院から依頼を受け、病院の感染リスク低減を目指すために、中国国内輸送の協力者の手も借り、日本にしかない自動排泄処理装置の寄付を行いました。「新型コロナの感染拡大以来、国内外から多くの寄付が届き感謝しています。多くの寄付はマスクや防護服などの消耗品ですが、現場は引き続き院内感染と人手不足に悩まされているためこの排泄処理装置はこれら問題を一度に解決することができ感無量です。」と感謝の言葉を頂きました。

岡川 秀毅 (おかがわ ひでき)

1957年生まれ。1981年オリックス㈱入社。1985年北京語言学院留学。1986年より日系対中進出を担当。1991年～2000年香港・上海、2004～2011年天津・台湾・上海に駐在し、中国個人／中国企業向け業務に従事。現在福祉用具開発・レンタルの㈱スペースケア代表取締役社長、㈱マネージメント・シェルパ社外取締役、日中関係学会評議員。共同執筆に「企業再生事例選」(金融財政事情研究会)、「組織再造」(台湾金融研訓院)、「中国の穴場めぐり」(日本僑報社)。